

目次

次期文学研究科長 ごあいさつ P 2

【特集】重要文化財・野中古墳出土品
..... P 2～3

同窓生からのメッセージ P 4

祝・日本学術振興会育志賞受賞 P 5

待兼山俳句会へのお誘い P 5

退職される先生方からのメッセージ
..... P 6～7

平成27年度第2回就活サポート講座
についてのご報告 P 7

第6回大阪大学文学部・文学研究科
同窓会講座についてのご報告 P 7

事務局便り P 7

「教育ゆめ基金」のご報告 P 8

第7回大阪大学文学部・文学研究科
同窓会講座のご案内 P 8



保存修理が完了した野中古墳出土甲冑群



企画展「野中古墳と「倭の五王」の時代」
のようす（2014年）

文学部・文学研究科に応援メッセージを！

次期文学研究科長 金水 敏

今日、大学を取り巻く社会の動向はますます厳しさを増しています。運営費交付金の削減等、財政面での締め付けはもろろんとして、特に人文系・教育系の部局に対しては文科省が直接、定員削減を含む再編成を示唆するなど、理工系重視、人文・社会・教育系縮小の方針をはっきりと打ち出してきました。その背景には、「理工系の成果は経済を活性化させるが、人文・社会系は経済活動に直結しない」「学生には、無用の学問をさせるより、実務的な職業訓練に力を入れるべき」などの、人文・社会系に対する社会（特に産業界）の無理解、誤解があるように感じられます。

文学部・文学研究会同窓会の皆様には、このような「人文・社会系無用論」と言うべき言説がいかにも浅薄で無意味なものであるかは申し上げるまでもないことと思います。二〇一五年、文学部で行った外部評価でも、文学部卒業生を受け入れた企業の皆様は口をそろえて「文学部出身の学生は物事を深く考えることができる」「文章力がある」など、高い評価を効かせてくださいました。同窓会のみなさまには、日頃「教育ゆめ基金」を初め、文学部・文学研究科の教育・研究に対し有形無形のご支援を賜っているところですが、ぜひとも皆様の生の「応援メッセージ」を聞かせていただければ大変ありがたいです。「文学部・文学研究科の学びはこんなところで役に立っている」「文学部・文学研究科を出たおかげでこんなよいことがあった」等々、皆様の体験やご意見を、お手紙、メール、なんでも結構ですので、同窓会事務局までお聞かせいただけましたら幸いです。みなさまの力強いメッセージをお待ちしております。



略歴

1956年生まれ。東京大学大学院人文・社会系研究科修士課程修了。博士（文学）取得。専門は国語学。1997年文学部に着任。主要な著書として『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003年）、『日本語存在表現の歴史』（ひつじ書房、2006年）、『コレモ日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』（岩波書店、2014年）、『役割語』小辞典（研究社、2014年）他。

特集

重要文化財・野中古墳出土品！

野中古墳出土品が文学研究科としては初めての重要文化財に指定されました（大阪大学としては、適塾（旧緒方洪庵住宅）について2件目）。これを記念して、今回特集を組み、ご関係のみなさんにご寄稿いただきました。

野中古墳出土品の重要文化財指定

高橋 照彦

大阪大学（文学研究科）所蔵の野中古墳出土品が、昨年九月四日付けで国の重要文化財に指定されました。多くの皆さんにとりまして、野中古墳は、おそらくあまり馴染みがない遺跡かと思いますが、考古学の世界では非常に有名な古墳です。

この野中古墳は、大阪府藤井寺市に所在し、現在ユネスコの世界文化遺産入りを目指している「百舌鳥・古市古墳群」の構成リストにも含まれています。時代としては、巨大な前方後円墳が大阪で次々に築造された、古墳時代中期（五世紀）の古墳です。

この古墳は、一九六四年に大阪大学文学部国史研究室（現在の日本史ならびに考古学研究室の前身）によって発掘調査がなされました。一辺三七メートルほどの方墳であり、それほど大きなものではありません。ところが、発掘を行った結果、十一領の鉄製の甲冑（よろい・かぶと）をはじめとして大量の遺物が出土し、一躍注目を浴びました。

ただし、野中古墳から出土した鉄製品は土中で錆が進行し、持ち上げることさえ、ままならないような状況でした。そのため、慎重に取り上げられた貴重な発掘品の多くも、しばらく木箱などに納めたままにせざるをえませんでした。

そのようななか、この数年前より、文化庁をはじめとする多くの補助金などをもとに、漸くにして鉄

製品の保存修復の作業に取り組むことができました。その結果、とりわけ甲冑類に関しては、十一領すべての保存処理を完了し、みなさんにもご覧いただくことができる形になりました。

そのお披露目が、二〇一四年の二・三月に大阪大学総合学術博物館で開催しました「野中古墳と「倭の五王」の時代」の展覧会です。それを機に、重文の指定へとステップアップすることができました。

重要文化財には、野中古墳出土品のうち、主要な二九一点が選ばれています。附属資料を含めるとさらに大量になります。その指定に至るまでには、大学の学生さんなどとともに、一つ一つの点検や計測・写真撮影など、気の遠くなるような作業がありました。関係の卒業・修了生、在校生などのご協力に、この場を借りて御礼申し上げます。

野中古墳出土品は、重要文化財の指定前後にも、随時、展示などをしてありますが、基本的には収蔵庫に納められた形になっております。残念ながら、常時、博物館の展示室などでみていただくことができません。阪大にいられた方が、いつでも目にするこので

きる環境を願ってやまないと。野中古墳出土品が未永く保存活用されていくために、今後ともご支援ご協力のほどをお願いいたします。



略歴

国立歴史民俗博物館、奈良国立博物館を経て、2002年より大阪大学文学研究科に赴任、2015年に同教授。専門は、考古学（飛鳥～平安時代）。

野中古墳出土品に期待すること

瀬川田 佳男（ねぎたよしお）

大阪府藤井寺市野中古墳の甲冑や武器を始めとする出土品が、二〇一五年、重要文化財に指定されました。私がこれらを初めて見たのは、今から三〇年以上前で、一五〇〇年前の甲冑なのに精巧に作られている技術に驚いた事、何故か赤いペンキが付いていて、指導教官の都出比呂志先生から学生運動の際に付けられたものだと言った事、この二つが印象的でした。

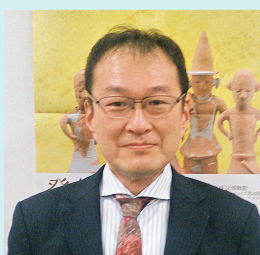
私は文化庁で野中古墳現地の史跡指定を担当し、出土鉄器の保存処理事業にも関わりました。遺跡と遺物の両方の保存に関わったことになり、今回の指定は公私にわたる二重の喜びです。重要文化財とは、考古資料等有形文化財のうち歴史上・学術上価値の高いもののことです。大阪大学は、美術工芸品としては初めてそれを所有する事になったのです。

では、私の立場から、今後に期待したい事を申します。現在、文化庁では、文化財を保存する事はもちろん、活用にも力を入れています。指定品は大阪大学総合学術博物館で、当面、通常は収蔵庫に保管され、何かの折に公開すると聞いていますが、初めての指定品

です。国民及び大阪大学の学生・教職員の方が、見たい時にはいつでも見ることのできる常設展示の場を作っていただきたいです。

また、重要文化財になりましたが、大阪大学にとっては貴重な研究資料です。これを機に、自然科学的手法を使うなど学部を越えた学際的な研究により、古墳時代の武器武具研究に新たな風を吹かせていただきたい。いずれにしても、大阪大学ならではの保存・活用、調査・研究について、オンラインワンの取組を期待します。

文化財は国や地域の歴史・文化を語る生き証人です。鉄器なので錆びていますが、一五〇〇年前は当時の最先端技術で作られた武器武具です。そうした素晴らしいモノが大阪大学にあることを、文学部卒業の皆さまにも、是非、見ていただきたいと思っています。



略歴
1982年、文学部史学科卒業。大阪府教育委員会、大阪府立弥生文化博物館を経て、文化庁記念物課文化財調査官に就任。2009年より、同主任文化財調査官として、日本の埋蔵文化財保護行政の中心的役割を担う。

野中古墳での経験を糧にして

橘 泉（たちばないずみ）

二〇一五年の夏の暑さが和らぎはじめた九月のはじめ、野中古墳の出土品が国の重要文化財に指定されたとの知らせが研究室から届いた。日本最大規模を誇る巨大古墳群、百舌鳥古墳群の大小さまざまな古墳に囲まれた堺市博物館で四月から勤務しはじめた私には、とても思い出深い考古資料だ。

私が学部四年生や大学院生として考古学研究室に在籍した二〇一一年から二〇一三年度は、野中古墳出土品の保存処理や活用に関するプロジェクト、国の重要文化財指定に向けての作業がなされていた時期にあたる。市民向けの小冊子やホームページの作成、博物館での展示作業や、指定に向けてのリスト作りと、本当に様々な経験をした。

最新の研究成果を追いかけるながら、「古墳とは何なのか」市民の方に簡単に分かりやすく伝える工夫をする。先生や先輩に教わるが多かったし、同級生や後輩たちとは、古墳の年代や出土品一点一点の系譜や意義について朝から晩まで議論した。ペナントレースを戦うような大学院生活だったが、考古学が好きで学びはじめたわたしにとって、阪大での野中古墳の講演会に

会場があふれるほどに聴講者が押し寄せた時は、自分が選んだ学問に誇りを感じた。

わたしが勤めている堺市には、市民運動により寸前で破壊を免れたいたすけ古墳がある。先人が残した貴重な資料や記録を残して次に伝え、新たな技術や知識で研究を深めていくことの大切さを学んだ大学時代。その時の経験や思いが、現在の、子供たちや地域の方に地元に残る文化財の素晴らしさを伝えたいという今の仕事に繋がっている。これからもこの原点を忘れずにいたいと思う。



略歴
2014年、文学研究科文化形態論専攻博士前期課程修了。甲賀市教育委員会を経て、2015年より堺市博物館学芸員として、百舌鳥古墳群をはじめとした同市の文化財の調査研究と発信の最前線に立っている。

同窓生からのメッセージ

比較的若い同窓生のおふたりからご寄稿いただきました。

古文書からコンピュータ言語へ

鈴木（福山） 奈穂

私が、大阪大学文学部日本史学専修を卒業したのは、二〇一二年。社会人としては四年目のまだまだひよっこです。

在学中は、公務員や教員の道も考えましたが、周りと違うことがしてみたくなり株式会社クラレに就職しました。弊社は大原総一郎という社会活動家を作った会社。日本史を学んできた身として、どのような会社か興味もありました。当然営業をやるのだと思っていたのですが、ふたを開けてみると配属はITを担当する部署（システムエンジニア）でした。古文書から、コンピュータ言語への転身を遂げました。あまりの世界観の違いに違和感を覚える暇もなく、なんとか今までやってきています。

レイヨンメーカー（旧社名は倉敷レイヨン）としてスタートした弊社ですが、レイヨンの生産はすでに終了しています。さらに、最近は海外での売上が過半となるなど、昔とは様変わりしました。その影響もあり、



鈴木（福山）奈穂（すずき（ふくやま）なお）
2008年4月 大阪大学文学部 入学
2012年3月 大阪大学文学部 日本史学専修卒業、同4月、株式会社クラレに就職、現在に至る。

私が担当する仕事もほとんど海外関係の仕事です。在学中は、自分が海外出張するなど思いもよりませんでした。が、昨年はシステムの稼働に伴って、二か月アメリカに滞在しました。大学時代、英語が嫌いだから日本史を選んだのに（笑）、なぜ私が海外で仕事をしなければいけないのか……未だに疑問なのですが、贅沢ばかり言ってもいられません。人生とはわからないものだとつくづく思います。

日本と海外での仕事の違いは、想像したほどには感じませんが、やはり顔を合わせて話すことの重要性はひしひしと感じています。電話やメールでも仕事はできるのですが、やはり重要な部分は皆で集まって話し合うという部分については変わらないような気がしています。どんなに技術が進んでも、出張はなくならないという暗澹たる思いと、やはりコミュニケーションは大事だという安堵の思いが交錯しています。

自治体の職員として

小松 健太

池田市役所への入庁を決めたのは、私自身が四年間の大学生活の拠点として市に深い愛着を感じていたことに加えて、進展される地方分権のその先、住民自治のひとつとしての「地域分権」をいち早く提唱し、取り組んでいるこの自治体ならば、他にはない形の市民サービスの提供に関われる、フランクに言い換えれば、この役所なら面白いことができるだろう、という興味があったからです。

しかし、採用されていきなり配属されたのは、人事

課。地方公務員法を礎とした諸々の条例規則に囲まれて呻吟する日々の業務のうちに、新卒の職員がつくべき部署ではないのかという疑問を何度も感じ、また、直接的な市民サービスから遠く離れた管理部门での仕事に勤務当初はただただ戸惑うばかりでした。

それでも、なんとか仕事に軌道に乗り始めると、当初の私の見立て通り「面白いことができる」職場なのだと思えました。ある時期から採用担当としての仕事の大部分を担うことになり、面接をはじめとした採用試験の業務管理はもちろん、市政の核となる通年の人事・採用計画にも関わり、また、新しい人材の確保をねらった人物重視型採用試験の導入や、市の魅力を感じてもらおう屋外型採用試験説明会の開催など、若手ながら主体的にチャレンジな提案を行い、実践することができました。

現在入庁三年目ですが、人口一〇万人、一般会計職員数六〇〇人程度の小さな自治体だからこそ、職員ひとりひとりに与えられるチャンスは多く、大きいと感じます。ただし、単なる思い付きでなく、確かな目的と根拠をもって行動する責任も要求されます。学ぶことが多く、何事にも思案する毎日を過ごすなか、勉強と発見の連続だった学部時代の経験は、一見仕事と関わりなく思えるも、確かに私の人間力となって支えてくれています。今後も熱意を絶やすことなく、様々な部署を経験し、能動的に市政に関わっていききたいと思っています。



卒論発表会にて

小松健太（こまつ けんた）
2009年4月大阪大学文学部に入学、
2013年3月同卒業（比較文学専修）
後、同年4月より池田市役所入庁、
市長公室人事課配属。

祝：文学研究科大学院生ライアン・ジョセフさんが 第6回日本学術振興会育志賞受賞！

ライアン・ジョセフさんが文学研究科において初となる育志賞受賞の快挙を果たしました。受賞の言葉を掲載します。

このたび第6回日本学術振興会育志賞を受賞いたしましたライアン・ジョセフと申します。アメリカ合衆国ミネソタ州で生まれ育った私は、中学生の頃から日本の古代史に関心を持ち、将来は日本考古学を学びたいという希望を抱いていました。そのためにはまず日本語の習得が必要と考え、学部課程はハワイ大学日本語学科で勉強しました。そして、卒業後の二〇一二年の春に在ホノルル日本国総領事館の推薦で、念願だった大阪大学文学研究科に国費留学生として入学することができました。

入学後は、考古学のフィールド調査や資料研究の方法を本格的に学び、現在は、古代遺跡の多い関西の地の利もいかして、①ヤマト政権成立過程における鉄製武器の生産と流通の実態解明、②人類史における戦争と国家形成に関する理論的検討、そして③比較考古学的アプローチによる日本古代国家形成過程の特質の解明、を主な課題として研究を進めています。

今回の受賞は、考古学研究室の先生方の日々のご指導、同輩・後輩、OB・OGの方々との刺激的な議論なくしてはありえないことでした。また、ご推薦をい



ライアン・ジョセフ (RYAN, Joseph)
日本政府国費外国人留学生として、
2012年4月に文学研究科に入学。
現在博士後期課程1年に在学中。専門は考古学。大阪府・堺市・藤井寺市・羽曳野市でつくる「百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録有識者会議」の特任専門委員としても活躍している。

ただに際しては、文学研究科や大学本部の先生や事務の方々に本当にお世話になりました。そして、家族の日頃の支えにも感謝しています。受賞は、私の研究実績への評価というより、将来の可能性に対して叱咤激励をいただいたものだと思います。そのことを肝に銘じて、より一層研究に励みたいと思います。

待兼山俳句会へのお誘い

待兼山俳句会の歴史は古く、旧制浪速高等学校同窓会の浪高俳句教室にまで遡ります。年月を経て旧制高校の卒業生が高齢になられたため、平成十三年に大阪大学関係者及びその家族に会員を拡大し、会の名も待兼山俳句会と改称されました。戦後、旧制浪高の豊中市待兼山のキャンパスと校舎が阪大の一部として使用されることになった縁によるものです。

現在会員は約三十名、その内遠方の方やお身体の悪い方は投句をされており、例会出席者は二十名前後です。文系の人も理系の人もあり、経歴は様々です。例会は毎月第三月曜日に大阪地下鉄淀屋橋より五分の大阪倶楽部という由緒あるビルの一室で開催しています。投句の締め切りは三時ですが、二時頃から次々と会場に集まり、前月例会に出された四つの兼題で作って来た句を推敲したり、当日卓上に活けられた季節の花を題材に句を詠んだりします。和やかな中にこれから始まる句会への緊張感もある静かなひと時です。多作多捨という虚子の方針に倣い、出句は他句会より多い十句です。(但し新人はこの限りに非ず)句会は二時間余りで、まず全員が選句をし、最後に選者の選が読み上げられます。現在選者は「ホトトギス」同人のお二人です。

梟は風の隙間を埋めて鳴く
木の間を出でて梟月に鳴く

あや (昭三四・文)
浩一郎 (旧制浪高・京大)
(十二月例会にて)

年に四回、日曜日に近郊へ吟行に出掛けています。また昨秋には一人三十句の合同句集第三集を出すことができました。一昨年より阪大のキャンパスライフサポートセンターの依頼を受け、学生さんたちとも句会を楽しんでいます。時には学生さんも例会に参加されるようになり、句会に新風を吹き込んで下さっています。

中庭の守衛のやうな秋の蝶 花帆
風に負けじと歩く就活生 望

自分の感動や思いを五七五という短い形式によって表現するのが俳句です。思わずほっと真情を漏らした時いい句が出来るのですが、往々にして自分だけしか理解出来ない一人よがりの句になってしまいます。句会で他の人々の目に触れて初めて自分の感動が皆に伝わっていないことに気づきます。また、同じ題材を他の人が全く別の角度から詠んでいることに驚かされます。それに句会では選者をはじめ、句歴何十年という人々と、全くの初心者、いわば同じ土俵で勝負をします。そして新鮮な視点や切り口によって新しい人の句が成功する場合があります。誰もが秀句を生む可能性をもっているのです。

どうぞ俳句に関心をお持ちの方は是非一度ご見学にお出で下さい。会員一同心よりお待ちしております。例会出席がご無理な方は、投句して下さい。結果を載せた会報をお送り致します。HPもご覧下さい。

待兼山俳句会代表
山戸曉子 (昭三四
文・三六修)

svka10950@zeus.
eonet.ne.jp 072-
241-6977



退職される先生方からのメッセージ

◆豊中キャンパス・グラフィティ

江川 温

私には定年が近づいてもあまり自慢の種になるようなことはありません。ただ、一九七九年四月から勤務しているので、文学研究科の教員としては最も古い時期の豊中キャンパスを知っている者のひとりであろうと思います。そこで勤め始めた頃のキャンパスのありさまを少し思い出して見ます。古い卒業生の方々には当たり前の話かも知れませんが。

そのころ阪大坂から登ってくると、現在学生交流棟や野外スタジオのある位置に上山池がありました。阪大で作られた絵はがき（一九八一年ごろ）の写真では、「イ号館」（現在の大阪大学会館）が水に影を落とし、白鳥が泳いで、絵のような風景に見えますが、綺麗な水ではありませんでした。しかし、酔っ払って夜中にここで泳いだという猛者もいました。現在の入り口の庭園の場所には軟式テニスのコートが並んでいて、応援団や部員さんたちが、うなり声としか聞こえない雄叫びをあげていて、イ号館の先生方の響きを買っていました。通学路とコートの境には金網があり、ここは学生さんの自由な広報空間となっていました。板きれにメッセージを書いて金網に貼り付けるのです。私が実見したものから一例を挙げると「子猫が生まれましたが、社会的経済的条件によって飼うことができません。どなたかもらって下さい。〇〇学部〇〇回生 〇〇、電話×××」というような調子で、笑えました。

今の大学に比べてはるかに乱雑でお世辞にも綺麗とは言えない空間でしたが、何か自由で生き生きとしたものがあつたように思います。思えば遠い昔です。



略歴
1950年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程2年次修了中退後、1979年大阪大学文学部助手に就任。大阪大学講師、助教授を経て、1996年より教授。史学研究会評議員、史学会評議員、日本西洋史学会代表、雑誌『西洋史学』編集委員などを歴任。専門は西洋史学。

◆阪大坂の猿、花見の宴の歳歳年年

川村 邦光

待兼山の生活が終わる。この時に際して、待兼山に猪が出たという知らせがあった。そして、猪を捕獲するのだという知らせも。そこで思い出したのだが、猿を見たことがあった。まだ、坂が小奇麗にされる十年ほど前のことである。とある秋の夕暮れ、私と三、四人、一緒に坂を下っていった。当時は、坂の右側に塀が長く連なっていた。塀の途切れるあたりに、猿がいた。それともかなり大きく太った猿であった。少しは驚いて、猿をやや見上げた。猿は悠然として、塀を降りて、藪のなかへと消えていった。待兼山に猿は棲息していないだろうから、箕面の山から降りてきたのではないか、かつてのボス猿が追われて来たのだろかなどと、居酒屋では憶測の猿談義で盛り上がった。この後、猿は姿を現わさず、見えない。

日本学では、四月の新生ガイダンス後、日本学棟前で、花見の宴を催している。隣では、福永さんの考古学研究室が日本学よりも豪勢に花見をしている。まさしく「一年歳歳花相似たり／歳歳年年人同じからず」という心境になる。「況んや是れ青春 日將に暮れんとし／桃花乱れ落ちて紅雨の如し／君に勧む 終日 酩酊して酔え／酒は劉伶の墳上の土に到らず」（李賀「将進酒」川合康三訳）という風だった私だが、よき学生・同僚に恵まれたと、今さらながらに思い、感謝に絶えない。



略歴
1950年生まれ。東北大学文学研究科博士課程満期退学。天理大学を経て、1997年に大阪大学へ。著書に『幻視する近代空間』『オトメの祈り』『オトメの身体』『巫女の民俗学』『聖戦のイコノグラフィ』『吊い論』『吊いの文化史』他。

◆阪大文学部での七年間

合山 林太郎

二〇〇九年から、七年間、日本文学研究室に在籍いたしました。このたび、種々の事情から、慶應義塾大学文学部に転出することとなりました。こちらに参りましたとき、私は三十一歳で、大学教員として十分な経験を持つておりませんでした。その私を多くの教職員の方々や学生の皆さんが育てていただきました。まずはこのことに深く感謝申し上げます。

阪大での生活を振り返って、まず印象に残っているのは、優秀な学生が多かったという点です。夜遅くまで勉強し、熱心に研究する（休暇中でも煌々ともっている研究室の灯りを、私はいつまでも忘れないでしょう）、しかし、おかしなプライドにとらわれることなく、素直で協調性があり、チームでの作業にも上手に取り組みることができる、こうした阪大文学部の学生の姿勢に、私は感銘を受け、励まされ、実際に多くのプロジェクトをその協力により実現することができました。

また、多くの国々の人と共に考え、研究するということも、私が、阪大において学んだことです。たとえば、日本文学研究室には、東アジアの国々に加え、欧州、中東、東南アジア、南北アメリカなど様々な国からの留学生が学んでいます。彼らとは、学問以外のことも含め、多くの有意義な対話をし、視野をひろげることができました。

教員でありながら、私の方が多くのことを教えていただきました。あらためて御礼申し上げます。次の職場となる慶應義塾大学は、適塾で学んだ福澤諭吉が設立した学校ということで、大阪大学とはご縁もあります。共同研究などで、なおお世話になることもあるかと存じますが、引き続き、変わらぬご厚意をお願い申し上げます。



略歴
東京大学大学院博士課程修了。国立国会図書館勤務を経て、2009年4月より大阪大学大学院文学研究科講師、2013年4月同コミュニケーションデザイン・センター講師（大学院文学研究科兼任）、2014年9月同准教授。著書に『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、2014年）。

◆後退の記

矢田 勉

もともと学会などには真面目に出席するほうではなかったのですが、近頃は司会役を仰せつかったりするのですが、比較的よく顔を出しています。その度に、その内容の劣化に、我々の研究領域の将来は大丈夫だろうか、と、慨嘆しています。発表の水準はもちろんだらうですが、その後の質疑応答で、若い研究者の発表に対しては居丈高に自説を開陳したり、いっぽうそこそこのキャリアの人に対しては、それが愚にも付かない発表であつても嫌らしく阿る輩がいたりして、うんざりすることしばしばです。

しかし、最近、ふと思ひ寄るところがありました。主観的には学会が急速に劣化しているように思われるけれども、実のところはそうではなくて、自分の「耳が驕つて」きたからではないかと。阪大文学研究科では、頻繁に研究会、研究報告会などが行われています。もちろん、未完成な研究の中間報告が多いけれども、目的意識や視座はなまじつかな学会発表よりしっかりしたものも多いし、質疑応答は忌憚なくかつ建設的です。日々そうした白熱した場に接しているから、学会が物足りなく感じるのではないかと。

その有り難みに気づくのが遅すぎました。いかに私が凡庸な教員であるかということでありましょう。私は、人文学教育の最前線を離れ、後方支援に移ります。そこから、日本の人文学を主導する阪大文学研究科に声援を送り続けたいと思います。



略歴
東京大学修士課程修了。博士(文学)(東京大学)。清泉女子大学・白百合女子大学・神戸大学を経て2012年に大阪大学文学研究科准教授。著書に『国語文字・表記史の研究』(汲古書院)。4月より東京大学大学院総合文化研究科准教授。

平成二七年度第「回就活サポート講座」について報告

平成二七年一〇月一五日(木)、文学部(担当「教育支援室」と本会の共催で、就活サポート講座「教えて、先輩!」卒業生、修了生に聞く進路のみつけ方」が開催され、約二〇名の学生・院生が参加しました。

まず、本学の三名の卒業生・修了生より、「生徒の生きる力を育む」、「大学職員としての働き方」、「社会に出るときに考え方」と題して、自らの体験を熱く語っていただきました。ついで、三グループに分けた聴講者のテーブルを順次回る形で、質疑応答・意見交換をおこないました。

今後とも本会では、文学部の就職支援活動に積極的に協力していく予定です。皆様のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

第6回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座についてのご報告



平成二七年五月九日(土)、「新緑の平城宮跡を歩く」が開催され、約二〇名の参加がありました。

もと奈良文化財研究所研究員の市大樹先生(本学日本史学准教授)にご案内いただきながら、平城宮跡資料館を見学した後、大極殿・遺構展示館・東院庭園・朱雀門をはじめ、平城宮跡の見所をたっぷりと歩きました。

今後とも同窓会ならではの講座を企画したいと思ひます。どうかご要望をお寄せください。

事務局便り

●お知らせ

◇「文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿」(二〇一二年版)について
二〇一二年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。販売(五千円)＋送料(百六十円)でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、新規に同窓会終身会費(一万円)をお支払いただいた方のうち、希望される方に一冊謹呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨を書き添え下さい。

◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金(一口二千元)を受け付けております。昨年度・今年度と、たくさんの方にご支援を賜りました。五頁にご寄付をいただいた皆様の御芳名を記載しております。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

【名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

口座番号 009401179043
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

●お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所・電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

●大阪大学文学部・文学研究科同窓会

- ◆会長…志水紀代子(S四〇卒)
- ◆副会長…柏木隆雄(S四四卒)、大西愛(S四〇卒)
- ◆事務局メンバー
- ◆事務局長…村田路人(S五二卒)
- ◆総務…岡田禎之(S六二卒)、高木千恵(H一〇卒)
- ◆会計…西田有利子
- ◆企画…市大樹(H七卒)、中尾薫(H一五修)
- ◆広報…舟場保之(S六一卒)、斎藤理生(H二〇卒)
- ◆事務局補佐…宮川真弥(H二二修)
- ◆事務局補佐(Web担当)…鈴木寛和(H二六卒)

- 住所…〒560-0802 豊中市待兼山町一番五号
- ホームページアドレス…<http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/>
- 事務局メールアドレス…dousoukai@letosaka-u.ac.jp

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

文学部創立60周年（平成20年）の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。平成25年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、平成27年度総計270万円ほどのご寄附をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。
(文学研究科長 和田章男)

平成27年3月～平成28年1月「教育ゆめ基金」寄附者リスト（敬称略・五十音順）

赤木 登代	岩尾希里沙	落合 傑	久保 照義	芝原 拓自	中畠 孝幸	堀川 幹夫
浅野 修	上江洲律子	籠島 靖	久保田泰宏	白土 芳人	中村 加津	榎本 裕之
栗根 功雄	宇野 康司	笠松 容子	熊田 亮順	高崎 宏子	中村 元保	松田 順子
井内 尚美	尾植 正順	片倉 穰	黒川 彩子	高見 寛信	野上 昌義	南川由美子
池田 美芽	大井 隆夫	加藤 玲士	高坂 香象	武市 修	垣生 満恵	宮本 孝二
池辺 義教	太田 晋介	上小澤由美	小谷晋一郎	田島 智子	濱吉 繁子	山上義太郎
石田 久	大塚 芳政	川真田 宏	小林 隆	谷口 博宣	東辻 照子	山田二三夫
石原 実	大村 睦子	神田 国臣	小林 正人	谷崎 陽子	平岩 静	山本 清司
磯島 啓子	小笠原文七郎	北泊謙太郎	酒井 浩	土池 敏子	平田 雅子	油井 澄子
井上 正	小川 英雄	北村 登	佐々田公子	中野多圭子	深水香津子	吉田 優子
今井 優	奥山 順子	衣笠 茂	真田 信治	中野 岳	古川 恵子	脇田 修



◆「教育ゆめ基金」の支出（平成27年度）

- ・海外留学支援制度奨学金 240,000円（2名分） 大学院生海外調査等助成 278,565円（5名分）
- ※年度内に海外留学支援制度奨学金240,000円と、障がいのある学生のための支援24,000円を支出予定
- 平成27年度1月末現在の残額：7,995,744円

第7回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座のご案内

2016年5月15日（日）14：00～ 文学散歩「近代大阪の橋とオダサク」

●講師の斎藤理生先生（本学准教授）とともに、中之島界隈の橋を散歩したのち、それぞれの橋についてくわしく描写した戦前の紀行文と、織田作之助の短篇を読み比べます。当時の面影を確かめた上で、改めて作之助の小説の手法に思いを寄せてみませんか。

※当日の行程 中之島図書館（正面玄関13：45集合）～川沿いに散歩後、大阪大学中之島センターにて斎藤理生先生の講演。参加費：500円。

※会場の都合上定員30名、先着順とさせていただきます。

●お申し込み方法

氏名、卒業（修了）年次、専攻を明記の上、メール又は葉書で下記連絡先までお申し込みください。

※締め切りは、4月30日（土）です。

メール：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所：〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会宛

同窓会寄付者
御 芳 名

（2015年2月～2016年1月入金分）
五十音順・敬称略

〈2014年度〉

河野 優子
山本 知伽

〈2015年度〉

一木 翔太
大島 智靖
木下 麻衣